

論文要旨

氏名 山本 三郎

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

『竪穴式石室の研究－王権と埋葬施設－』

論文要旨（別様に記載すること）

別紙のとおり。

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、フロッピーディスク（1枚）を併せて提出すること。
（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。）

論文要旨 (別紙)

古墳の埋葬施設の構造と王権の性格が関連付けられることは、倭国王墓とも目される 200m を超える超大形前方後円墳を中核に形成されている畿内地域の大型古墳群が、その造営地を移動するたびに、その埋葬施設の構造を替えているという考古事象から読み解くことができる。

畿内地域の大型古墳群は、大和盆地東南部の広義の大和古墳群→大和盆地北部の佐紀古墳群→大阪平野の古市古墳群、百舌鳥古墳群と移動している。古墳時代前期から中期にかけて、倭国王墓がこの古墳群の中にあることは、その墳丘規模からみてまず間違いないであろう。

大和古墳群は弥生時代終末期から古墳時代前期前半を中心とする墳墓群である。佐紀古墳群は古墳時代前期から中期にかけて築造された古墳群であり、その西群は前期後半の築造であり、佐紀古墳群東群は中期に築かれている古墳群である。古市古墳群、百舌鳥古墳群も古墳時代中期の期間に築造された古墳群であり、列島内では最大規模の大型古墳群である。

割竹形木棺と竪穴式石室という棺・槨構造もつ埋葬施設が、大和古墳群の前方後円墳に採用されている。大型古墳群が佐紀古墳群に移動したとき、組合式石棺と特異な竪穴式石室の棺・槨構造をもつ埋葬施設を創出している。佐紀古墳群から河内・和泉地域にある古市古墳群、百舌鳥古墳群にその造営地を移したとき、竜山石製の典型的な長持形石棺（組合式石棺）と変容した竪穴式石室という棺・槨構造に変化している。

古墳時代後期には、刳抜式石棺としての家形石棺が畿内型横穴式石室とともに登場している。摂津地域の今城塚古墳がこの時期における最大の前方後円墳であり、多くの研究者が継体大王の古墳に比定されると考えている。

このことから王権と埋葬施設の構造が密接に関係していると理解していただけるであろう。

大和古墳群には、箸墓古墳（前方後円墳、280m）→西殿塚古墳（前方後円墳、220m）→行燈山古墳（前方後円墳、240m）→渋谷向山古墳（前方後円墳、300m）と順次築造されていることは、墳丘形態や採集されている埴輪型式等からみて、まず、間違いないところであり、大方の研究者が共有している認識である。

この大和古墳群には古墳時代前期の倭国王墓とも目される墳長 200m 以上の超大形前方後円墳が 4 基も継続して築造されていると捉えられる。大和古墳群の南側にある磐余の地には、古墳群を形成せず、単独の様相をもって築かれた桜井茶臼山古墳(207m)とメスリ山古墳(224m)の超大形前方後円墳が存在している。

このことは、日本列島内に政治権力の中心部が形成されたことを物語っており、大和盆地東南部の地に出現期古墳から古墳時代前期にかけて、大王墓と大王クラスの王墓とも捉えられる超大形前方後円墳が 6 基も築造されていることからしても、列島内に中枢部が形成された状況が如実に表れていると理解できる。

大和古墳群における 4 基の超大形前方後円墳の埋葬施設は不明である。しかし、桜井茶臼山古墳やメスリ山古墳が長大型竪穴式石室であること、大和古墳群の中山大塚古墳、黒塚古墳、下池山古

墳の100m級の前方後円(方)墳が長大型竪穴式石室であることから、大和古墳群の4基の超大形前方後円墳も長大型竪穴式石室を採用していると捉えても大きい間違いはないのであろう。

この現象を捉えて、初期ヤマト王権の成立と把握している。

そして、最古の超大形前方後円墳が箸墓古墳であると捉え、この古墳の築造をもって、古墳時代の開始と把握していることも多くの研究者の共通認識になっている。

古墳時代の開始の暦年代については、まだ、定説化には至っていないが、筆者は、土器様式と年輪年代学の成果からみて、3世紀の第四半期中に起こったことと捉えているが、20~30年の幅の年代観については、まだ定点がみえず、今後の検討が必要である。

この論文の根幹である第3章は、いまから30年前の1980年に、『ヒストリア』に書いた「畿内における古墳時代前期の政治動向についての一視点—埋葬施設の構造を中心として—」を基調にしているが、その後の主要な古墳時代前期前方後円墳の発掘調査の急増やそこから新しい視点で叙述された埋葬施設に関する論文は、新たな展開を示している。それらの発掘調査報告書や論文を参考に、根幹部分は大きく改変していないが、新稿に近いかたちに書き改めたのが第3章である。

第3章「畿内地域の竪穴式石室の研究—古墳時代の政治動向—」では、初期ヤマト王権が成立して以降の政治状況を長大型竪穴式石室の基底部構造を首座において、墳形とその規模を関連づけて論じている。

古墳時代前期には、倭国王墓の埋葬施設はもちろん、畿内地域とその周辺の地域王墓とも目される100mを前後する規模の前方後円(方)墳の埋葬施設にも、長大型竪穴式石室が採用されている。その両者の竪穴式石室には、粘土棺床、およびその四周と下部に礫石を使用するという基底部構造が採用されている。そして、粘土棺床構築には幾度も朱彩がなされるという儀礼的行為が実修されている。

こうした基底部構造を採用する目的を遺体・木棺の保護という視点でとらえた論稿が多い傾向にあるが、正鵠を射ていないであろう。

その根拠は、「畿内様式」とも言える粘土棺床とその四周・下部に礫石を使用するという基底部構造をもつ竪穴式石室が限定的な分布状況を呈しているからである。その分布の中心は畿内地域と吉備地域にあり、他の西日本の各地には拠点的、局地的に採用されている状況にすぎない。

粘土棺床のみを設置し、その四周・下部に礫石を採用しない基底部構造をもつ長大型の竪穴式石室は、「畿内様式」の竪穴式石室より、西日本各地にある程度分布している。

また、粘土棺床も設置しない長大型の竪穴式石室が、東海地域、関東地域にも多く知られている。

木棺・遺体の保護という普遍的な思想からみれば、このような状況は不適合であると言える。

古墳はその成立当初から、墳形、棺槨構造、副葬品の内容に至るまで画一的な構成要素をもって出現している。共通のイデオロギーのもと、古墳時代成立前夜の弥生墳丘墓段階の政治的関係を止揚して、小異を捨て大同団結した姿態が初期ヤマト王権であり、それは畿内地域と吉備地域を中心に政治的連合関係が成立した結果にほかならない。

古代中国は後漢末期から混乱しつづけていた。東アジアの政治状況に対応する必要上、倭国も中

心を形成する必要に迫られていた。初期ヤマト王権は対外交渉を確実にこなすために中枢部を形成する必要に迫られて出来上がった性格を帯びた政治権力である可能性が高い。これは中国・魏王朝の冊封体制の中に取り込まれた邪馬台国が展開できる政治状況の問題ではないと捉えている。

第3章では、このことを実証する手段として、古墳時代前期の大王墓や地域王墓に採用された長大型竪穴式石室の基底部構造を分析してきた。埋葬施設の中でも、「秘伝的要素」の強い竪穴式石室基底部構造は、粘土棺床とその四周・下部に礫石を使用するという行為の中では、吉備地域等において共通性を有し、斉一性の中にあるが、基底部構造の細部の仕様は地域性をもって多元的に出現するという様相を呈している。

この現象は、初期ヤマト王権の政治構造も一枚岩ではないことを表現している。畿内地域では、山城地域の向日丘陵古墳群と河内地域の玉手山古墳群が共通した竪穴式石室基底部構造の変遷をたどり、摂津地域の政治勢力は政治的連合に組していながらも、竪穴式石室の基底部構造が異なり、天井石の架構の方法にも独自性を保持していることを論じた。

古墳時代を開始した初期ヤマト王権は、山城地域の向日丘陵古墳群、河内地域の玉手山古墳群、摂津地域の弁天山古墳群の被葬者である有力首長層が支えた王権であり、吉備地域の有力首長層もこの王権の中枢部にあり、この王権を支えたのである。竪穴式石室の基底部構造からこのことを論じたのが第3章である。

第4章「畿内地域における前期古墳の複数埋葬について」の複数埋葬論もこの論文の骨子をなす。

第4章では畿内地域における古墳時代前期前方後円墳の埋葬施設のあり方を論述した。同一墳丘内に埋葬位置を変えて、二人以上の死者を埋葬していた場合、従来、「併葬」、「陪葬」、「多葬」と呼称されていたが、研究史も踏まえて「複数埋葬」とした。

古墳時代前期前方後円墳の複数埋葬を検討すれば、畿内地域では前方部に粘土槨が採用されている場合が多い。

大和・河内・山城・摂津の畿内諸地域の前期前方後円墳には、後円部に「畿内様式」とも言える整美な竪穴式石室が、前方部には粘土槨が採用されているという同質性が指摘できる。この同質性から粘土槨は、古墳時代前期後半にヤマト王権が、支配階級のナンバー2である首長層の埋葬施設として考案した従属的な埋葬施設であることを論じた。そして、基底部構造からみた粘土槨の類型化と複数埋葬の類型化を行った。

当時、支配階級の首長層も任意に埋葬施設を選択できた訳でなく、支配階級内部の身分制的な位置によって、ある程度採用できる埋葬施設の種類が決められていたことを論じた。埋葬施設を研究対象とするこのような視点は、古墳時代の支配体制を解明するのに大変有効な手段である。

第2章「長大型竪穴式石室の出現と変容」は新稿である。

第2章第1節では、長大型竪穴式石室出現前夜の弥生時代後期後半から終末期における埋葬施設について論じた。

弥生時代後期後半から終末期にかけて、瀬戸内地域の楯築墳丘墓等や山陰地域の西谷3号墳丘墓等、丹後地域の赤坂今井墳丘墓等で展開された各地域の弥生王墓とも目される墳丘墓には、100mを超える規模のものは存在しない。

これら弥生墳丘墓の埋葬施設の構造は多様で、楯築墳丘墓は木槨墓であり、丹後地域には舟底形木棺とも呼称される舟形木棺を直葬するという埋葬様式を共有している政治勢力が存在する。丹後王墓とも称される赤坂今井墳丘墓も舟形木棺直葬という埋葬施設である。山陰地域の四隅突出型墳丘墓の世界では、最高位の埋葬施設は木槨墓であり、中小規模の首長墓の埋葬施設は組合式木棺直葬である。

吉備地域の最高位の埋葬施設は、楯築墳丘墓に採用された木槨墓であり、山陰地域と共有している。しかし、中小の首長墓の埋葬施設は短小タイプの竪穴式石室であり、支配階級の階層差のあり方が、山陰地域の四隅突出型墳丘墓の世界とは異なっていたのであろう。

これらの弥生墳丘墓の平面形態は、出雲地域・伯耆地域・因幡地域といった山陰地域では四隅突出型墳丘墓を採用していることで共有しているが、丹後地域・但馬地域といった山陰地域では方形墳丘墓である。吉備地域の弥生墳丘墓の平面形態は、双方中円形や長方形、円形、前方後円形と多様である。

これら弥生墳丘墓と出現期古墳との間の隔絶は極めて大きい。

邪馬台国問題は弥生時代の中の出来事であり、古墳時代前期の初期ヤマト王権との関係とは根本的にその政治構造が異質であることを論じたのである。

第2章第2節では、古墳時代前期における長大型竪穴式石室の基底部構造について列島規模での大分類を行い、長大型竪穴式石室I-a類が「畿内様式」の竪穴式石室の基底部構造であり、畿外においてこの様式を採用している古墳は、ヤマト王権と密接な政治的関係をもつことを論じた。

倭国に中枢部が形成され、倭国の中心部から発進される情報に地域政権が如何に対応するかが迫られ、その対応の仕方が地域ごとに異なっている。このことが地域における弥生墳丘墓と古墳を捉え難くしている。このことをケーススタディとして叙述したのが、第2章第3節であり、安芸地域の太田川流域と吉備地域でこの問題を論じている。

また、播磨地域を対象とした第7章「埋葬施設からみた弥生墳丘墓と古墳―播磨地域の事例研究―」もこのことを論じており、第6章「阿讃地域の長大型竪穴式石室の出現をめぐって」もこの課題を扱っている。地域政権の動向分析として一定の成果をあげていると思っている。

第2章第4節では、竪穴式石室の変容を扱っており、大和盆地東南部の大和古墳群から大和盆地北部の佐紀古墳群に大形前方後円墳が移動した時、埋葬施設にも大きな変化がおこっていることに注目した。

安定したかにみえた初期ヤマト王権も、百年前後を経過すると、その中枢政権内部に制度疲労を起した。新しい東アジアの政治状況に対応できる体制にはなっていなかったのである。

巨大な前方後円墳の築造の地が大和盆地北部の佐紀古墳群に移動した。このことは、東アジア情勢の変化にも対応するためにとった体制であった。

その変化は、高野槨を使用した割竹形木棺（刳抜式木棺）から、特異な組合式石棺と特異な竪穴式石室を採用するようになるというものである。典型は佐紀陵山古墳であり、大和地域以外で、特異な組合式石棺を採用するのは、畿内地域では、山城地域の妙見山古墳であり、河内地域の松岳山古墳である。畿外地域では、北部九州の谷口古墳、東日本の甲斐地域にある大丸山古墳である。

この変化に連動し刳抜式石棺（割竹形石棺・舟形石棺）を採用したのは、讃岐地域、肥後地域、越前地域などである。丹後地域もその中に含まれるであろう。このことを論じたのが第2章第4節なのである。

第6章は、阿讃地域における出現期古墳前後の埋葬施設を祖上にのせて論じた箇所である。近年の阿讃地域における埋葬施設の発掘調査成果をみれば、長大型竪穴式石室の初現も、粘土槨の初現も阿讃地域なのではないかという状況を呈している。そこで、出現期古墳前後の長大型竪穴式石室をもつ当該地域における四古墳の竪穴式石室の構造を詳細に検討した。西山谷2号「墳」、雨滝山奥14号「墳」にみられる墓壇底中央をU字形に掘り込み、その墓壇底中央に薄い粘土棺床を設けるという基底部構造をもつものを阿讃E型、宮谷古墳、雨滝山奥3号墳にみられる平坦な墓壇底中央にU字形の粘土棺床を設置するものを阿讃D型と類型化し、その特質を論じた。阿讃E型の竪穴式石室は垂直に壁体を積み上げる。一方、鶴尾神社4号「墳」の竪穴式石室は合掌型の壁体構造であり、阿讃の最古型式の長大型竪穴式石室には二系統の系譜があることを論証し、墳丘形態と連動していることも実証した。阿讃D型は「畿内様式」の竪穴式石室の影響下で成立していると捉えた。阿讃E型の石室が阿讃D型に先行していることは間違いないであろう。また、類粘土槨の基底部構造は、阿讃E型と共通した構造であることも論じた。

第7章は、埋葬施設からみた弥生墳丘墓と前期古墳の関係というテーマのもと、播磨地域のこの時代の問題を論じたものである。播磨地域は五つの河川によって五つの地域に分けられる。新しい文化、知識は沿岸部にまず伝わり、内陸部には、その二次的な文化が伝達されるという地理的構造である。

弥生時代後期から古墳時代前期前半には、揖保川下流域が重要な役割を果たしていた。古墳文化が定着した古墳時代前期中頃には、加古川下流域がヤマト王権から重要視されていることを日岡古墳群の内容分析から証明した。

また、定型化した前方後円墳の出現が古墳時代の開始のメルクマールであるとの見解から、竪穴式石室の構造を基準にした段階論を提唱し、三角縁神獣鏡の副葬の開始が大きな画期であり、それは長大型竪穴式石室の基底部構造の「畿内様式」の成立と連動している現象と捉えた。

第8章「方墳についての二・三の断想」は、古墳成立前後に等閑視されていた東播磨地域の状況を方形墳と埋葬施設の組合せの視点から、加古川型方形墳と明石型方形墳と類型化し、その歴史的意義を解いた。加古川型方形墳の地域では、播磨地域内陸部の西脇市滝ノ上20号墳の内容が重要で、古墳成立前後は丹後地域や山陰地域の方形基調の墳墓社会に属し、丹後、山陰の政治権力と親縁な関係であったことを検証した。

また、播磨地域の古墳時代中期の大型古墳群である玉丘古墳群と御着古墳群の方形墳のあり方から大形前方後円墳同士の比較では解けないキーワードが方形墳にあるとの見通しを叙述し、方形墳の検討は古市古墳群、百舌鳥古墳群の性格分析に有効であることを解いた。

第9章「タニワ（兵庫）の長刀と墳墓」は、兵庫丹波（タニワ）にある篠山市内場山墳丘墓の内容の再評価を行い、丹後地域の弥生王墓が移動した可能性が高いと捉えた。内場山墳丘墓は古墳成立前夜の弥生時代終末期後半の方形墳丘墓で、その中心埋葬施設には全長93.5cmの素環頭大刀と鑿

頭式鉄鏃 13 本等が副葬されており、なかでも素環頭大刀は当該時期の秀品で舶載品である。埋葬施設のあり方、棺構造が丹後地域の王墓に採用されている舟底形木棺の可能性が高いこと、供献土器の特徴が丹後地域の土器様式であることなどから、丹後地域の大風呂 1 号墓→赤坂今井墳丘墓という弥生王墓の系譜上に位置付けられることは動かないと解釈した。これまで大王墳の移動論は論じられているのに、地域王墓の移動論は論じられていない。こうした視点は、この論稿から始まる新たな課題である。

第 10 章「王権と海上交通・序説」では、海を意識した古墳と海上交通を絡ませて海辺の古墳の歴史的意義を論じた。対象としたのは環大阪湾と播磨灘に面する古墳である。このなかで神戸市西求女塚古墳と同市五色塚古墳が重要な古墳であることを指摘し、前者を丹後地域の王墓の南進と理解し、後者は大和盆地北部の佐紀古墳群に移動した時期の所産であることを論じ、中央氏族が「封邑」を得て築造した古墳である可能性が高いことを指摘し、王権と海上交通の重要性を論証した。

今回の論文は、私の長い研究生活の中で古墳時代の埋葬施設の旧稿を出来るだけ現在の研究状況に照らし、改稿したものである。第 1 章と第 2 章は新稿であるが、この論文の骨子である第 3 章は旧論を大きく書き改め新稿に近い。

この論文を構成している考古学の研究課題は、4 つの視点からなっている。

1 つ目は、古墳時代前期における中枢部の政治構造の解明であり、第 3 章と第 4 章で論じている。

2 つ目は、列島に中心が形成された以降、地域政治集団の勢力がこの事態に如何に対応したかという地域考古学の視点である。これを第 5 章から第 9 章で論じた。

3 つ目は地域政権の王墓の移動という課題である。倭国王墓の移動については多くの論考があるが、地域政権の王墓が移動しているという研究方向は私のオリジナリティである。第 9 章と第 10 章でそのことを論じている。新しい研究視点であるため十分に論を展開できていないかも知れないが、きわめて重要な視点である。往還する墳墓という視点で今後も研究を深めていきたい課題である。

最後の 4 つ目であるが、政治集団がもっている支配領域の課題である。

西日本においては、古墳時代を生み出す体制は弥生時代後期後半の中に醸成されていると理解している。弥生時代中期後半以降の北部九州の奴国、伊都国等の王墓には、前漢鏡や後漢鏡を多量副葬する勢力がある。その政治勢力は対中国に向いている。すなわち、中国の冊封体制に組み込まれている構造である。文献上で空白の四世紀と言われた時代は、266 年以降の三世紀の後半から四世紀代のことである。畿内を中心とする勢力が新たな思想で列島を纏めあげることを目指した。しかし、律令時代の用語を使用して、大和地域や播磨地域などの地域名称を使用しているが、その実態はきわめて危うい。そのことを古墳出現前夜で論じたのが、第 9 章であり、20 km エリヤの中で、著しく異なる墳丘墓が作られていることを指摘した。墳墓群単位で古墳前後を厳しく見直す必要性を感じており、第 5 章「弥生墳丘墓から古墳時代の開始へ」は、この視点で論じた論稿である。